

台湾原住民による映画を通じた 自文化の発信・表現

2015年10月2日から6日まで、台北において開催された第8回台湾国際民族誌映画祭に参加した。本映画祭は、台湾を代表する民族誌映画作家である中央研究院の胡台麗が发起人・ディレクターとなり、2001年より隔年で開催されてきた。本映画祭は、アジアで唯一定期的に開催されている民族誌映画祭であり、映像人類学の国際的な研究ネットワークのなかでも幅広く認知されている。まずは、映画祭の概要から報告したい。

映画祭の概要

本映画祭には、テーマ別の上映セッションがあるが、賞の授与を前提とするコンペティションは設けていない。ちなみに今回の上映セッションは、〈抵抗と和解〉、〈無形文化の変容と保存〉、人の生死に関わる問題を扱った〈生命の風景（台湾、アジア、世界）〉という3つのテーマに分けられた。規模の大きな映画祭や国際学会等では複数の会場で異なるセッションが同時開催されるようなことがしばしばみられるが、この映画祭では上映会場を1箇所にとり、全作品の視聴が可能となるように作品プログラムが組まれていた。

作品の選抜は、台湾の人類学者や映画監督、計36名から構成される作品選抜委員会によって行われた。ちなみにドイツのゲッティンゲン国際民族誌映画祭の第12回大会（2014年）では、出品数400余りから約60本を選別して上映した。台湾国

際民族誌映画祭は、こうした欧州の学術映画祭と比べても遜色なく、今回は、世界各地から応募された700本を超える映画から36本を厳選して上映している。上映後には、招聘された作品の監督、プロデューサーあるいは作品配給元の責任者によるトーク、聴衆との議論も行われ、監督が欠席の場合も、作品に関連する研究を行っている台湾の研究者が会場に招聘され、作品の解説や、聴衆との質疑応答を行った。

会場は台北市の万華区と呼ばれる繁華街にある映画館 Wonderful Theater（真喜美劇院）である。私が今まで参加してきた欧州の民族誌映画祭は、人類学を専攻とする学生や映画監督等が中心に集い、専門性の高いイベントという印象が強かったが、台湾国際民族誌映画祭は、会場の立地、利便性もあるのか、一般客の参加も多いようで、週末には会場は満席となり活況を呈していた。けして人類学や映画関係者に閉じた会ではなく、幅広い客層を集めている印象を受けた。ディレクターの胡によれば、2001年の第1回大会の開催数日前に台北が巨大な台風による暴雨にさらされ、会場予定地であった中央研究院の建物が浸水し、急遽市内の当該映画館を代替会場に設定したとのことだ。この判断は功を奏し、繁華街の映画館を使用したことにより、民族誌映画の存在を知らない若者たちも開催者の予想以上に入場することになった。以来本映画祭は、一貫して Wonderful Theater を上映会場として使用し続けているという。

回復運動の歴史を照射する *The Mountain* (2015) 等があげられる。Wen Pei-Chyi と Wang Ying-Shum による *Songs of Hunun-gaz* (2015) はブヌン族の音楽文化の継承過程の記録である。全校児童が23名という廃校寸前の小学校の児童たちが、ブヌン族の音楽文化をフィーチャーした合唱隊を結成し、全国歌唱コンテストに参加し、歌を通じた自文化の表現に四苦八苦する姿が描かれている。

台湾では1996年より原住民族文化事業基金が設立され、原住民族文化をテーマにした映画製作と配給、原住民向けのテレビ局やラジオ局等、原住民による表現活動、自文化の発信に対する助成が広く行われてきた。本映画祭で発表された *The Mountain* も本基金の助成を受けて、製作された作品である。

本作は、2016年11月12日・13日に民博で開催された台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化への視点—台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より』において、監督の Su Hung-en、プロデューサーの Li Jia-ling を招聘し上映された。この企画は、台湾原住民による自文化の映画を通じた表象と探求を客体化してとらえて分析するだけでなく、世界各地の先住民やマイノリティの文化をテーマにした民族誌映画と並べて上映・議論することによって、台湾文化の独自性や創造力、作り手の映像に対する価値観や思考を浮き彫りにするというねらいがあった。台湾における原住民による映画を通じた自文化の発信をめぐる創意工夫が伝わる会となったと考えられる。民博では今後も同様の企画を継続しつつ、台湾の原住民作家たちとの交流と記録の方法論をめぐる建設的な対話を重ねていきたい。

原住民による自文化の発信・表現

本映画祭を特徴づける最大の要素は、台湾の原住民作家による映画製作と公開を積極的にプロモートしている点である。

アミ族の映画監督 Laway Dalay が父との関係性に基軸を置きつつ、アミ族の漁業の変容を描いた *The Vast Deep Ocean* (2015) や、タロコ族の母を持つ映像作家 Su Hung-en が、祖父の日常生活や生活史から台湾原住民と原住民の権利



『The Mountain』(監督 Su Hung-en) より抜粋(同作監督より提供)。

文 川瀬 慈

国立民族学博物館文化資源研究センター助教。映像人類学、アフリカ研究。IUAES 国際映像人類学理事會理事(2008年～)、ハンブルグ大学(2013年)、プレーメン大学(2014年、2016年)、山東大学(2016年)、メケレ大学(2017年)において客員教授として映像人類学の理論と実践に関する指導を行う。第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭作品選抜委員(2014年)。